

松下さんを偲ぶ

日本住宅金融㈱ 社長 庭山 慶一郎



戦前大阪に田中車輛という会社がありました。この会社は戦後になって近畿車輛に合併されましたが、わたしが東大に在学していた昭和の10年代には国鉄から電気機関車の注文をうけたりして盛況でした。この会社は田中太介という人が創業された会社で、田中さんはわたしの父と同じ明治2年生れの竹馬の友であり、若い頃、父と共に円山四条派の上田耕沖先生の門に入って一緒に画の道の修業をした人です。わたしの父は耕園と号して明治末から大正・昭和初期にかけて大阪画壇で活躍し、画家として生涯を一貫しましたが、田中さんは途中で筆を絶ち、商売に転向されたのです。出身はたしか尼崎の方で、尼崎から大八車に商品を積んで自分で大阪市内の得意先に売りに歩いたことなどの昔の苦勞話を聞いた記憶があります。しかし、わたしが直接お目にかかった頃はすでに70才に近い方で、大阪では名の知れた人でした。枚方の御殿山に宏壮な邸宅があり、大阪に著名な人がこられたとき、よく宿泊所や迎賓館として使われていました。戦争も近づいた頃、第4師団長として大阪に赴任された李垠殿下(朝鮮王族、当時日本の公族)の宿泊所となっていたこともあります。田中さんはまた祇園などで瀟洒な遊びをされた方で、父もしばしばお招伴に与ったようです。

昭和12年の夏のことです。この年はわたしが東大法学部に入学してはじめて東京で生活することになった年であり、4月に上京して間もない7月7日には蘆溝橋事変が起こり、日本が本格的に大陸に介入することになった年でもあり、またわたしがしばしば使う言葉、「大日本帝国の全盛期」でもありましたので、わたしにとっては思い出の多い年でしたが、夏休みに大阪に帰省していたと

き、田中さんが淡路町1丁目の父の宅にこられ、いま、ちょうど国鉄から注文を受けた電気機関車の製造中だからと言って、父に見学してほしいと招待されました。自分の創業した会社の盛業ぶりを竹馬の友だった父に見てほしかったのだらうと思います。そのとき帰省中のわたしにもどうぞということになり、わたしは父のお供をして東野田にあった田中車輛工場を見学に行きました。ひとわり見学をすませた後、当時の京阪電車の天満橋終点付近にあった洋風レストランで昼食のご馳走になったのですが、そのとき田中さんと父の間に交されてた世間話の1コマが50年以上たった現在でも耳について離れません。もちろんわたしは学生ですから、2人の話の中に割ってはいることはできません。2人の話を食事をしながらただ聞いていただけですが、田中さんの「このごろうちに松下幸之助という若い者が出入りしてますねん。こいつは偉いやつだっせ。そのうちにきっと出世しまっせ」という言葉がわたしの耳をとらえました。当時、松下さんは40才ぐらいのはずですが、普通の商人とは何か違ったところがあったのでしょう。自社の製品を電気機関車の部品として田中車輛に使ってもらうために夜討朝駆けで、枚方の田中邸に出入りされていたその真摯な態度が田中さんの心を打ったのだと思います。そのころ大阪では東洋紡や日紡をはじめとする紡績各社、伊藤忠、丸紅などの関西五綿、武田、塩野、田辺などの道修町の御三家などは誰でも知っていましたが、松下電器はまだそれほどの会社ではなく、

ナショナル乾電池という看板が人々の目にとまり出した頃でした。しかし果せる哉、田中さんの言われたように、その後松下は大阪の松下になり、日本の松下になり、世界の松下になりました。やはり偉大な人は若い頃から普通の人とは違う何かがあることの証明でもあります。田中さんが人を見る目のするどさにもわたしは感心しました。

わたしは松下さんに直接お目にかかったことはありませんが、田中さんから聞いた一言によって松下さんを注目し、かつ尊敬していました。松下さんに関する読物や記事はたくさんあり、わたしもときどきはそれらのものに目を通していますが、これらの書物や記事には松下さんを「経営の神さま」と評しているむきが多いようです。しかしそれは正確ではありません。松下さんは「経営者」といったらかな道を歩んでこられたのではなく、「商人」というきびしい道を歩まれた方だと思います。合理主義、反骨精神、自己責任という大阪商人の真髄に徹した方です。

戦後、経営という言葉がブームになり、経営に関する書物は書店に溢れ、大学に経営学部ができ、何々経営学会とか協会とかの集りは無数にあります。経営はしかし単なる技術であり、学校で勉強したり、先輩のすることを見ておれば誰でも経営者になれます。そこらに大勢いる会長とか社長とかの名のつく人はそういう人たちがほとんど

です。わたしもそれに含まれています。わたしは日本住宅金融を創業して20年近くになります。もちろんわたしの独特の考え方とアイデアによってここまで引っぱってきましたが、それには東大の学歴とか大蔵省で長年働いたことによる知識とか、日本のエリートとのお付き合いによる人間関係とかの多くのハンディを使っただけの結果です。無一物、無学歴の一小僧から、何ひとつハンディをもらわないで、努力の積重ねで現在の松下を作られた松下さんは、ただ「ご立派」の一語につきま

す。松下さんをご自分の会社をよくすることが社会のためになるという考え方だったと思います。したがって会社のトップになると次は会長になって財界活動をするといったことはされなかった。それが現在のサラリーマン重役とは違うところです。総理大臣を囲んで「めし」を食ったり、政治家のパーティに出席したりするなどのことを財界活動というのだそうですが、本当に株主のためにお客さまのために働いている人なら、そういう余裕は時間的にも金銭的にも本来ないはずで、現在の企業のトップの人間がみな松下さんのように行動していたなら、財界と称するものは存在せず、リクルート事件なども起こるはずはないのです。松下さんの御他界にさいし、大阪船場で育ったわたしは、多くのことを考えました。